

# *Mothers' Boys, The Fifth Child* における人間関係

—— 母性を中心に ——

丹 羽 正 子

An Interpretation of Two Novels: *Mothers' Boys* and *The Fifth Child*

—— Research on Motherhood ——

Masako Niwa

## Abstract

In Margaret Forster's novel, *Mothers' Boys*, the pain of two mothers, the mother of a juvenile thug, and the mother of the thug's hapless victim, is explored. Doris Lessing, who got a Nobel Prize in Literature in 2007, wrote *The Fifth Child*, in which she also depicts the pain of motherhood at the birth of her fifth child. This paper is to explicate the relationship of sons and mothers in both stories and to give the further research on the theme of "what is the true meaning of motherhood?" The paper consists of three sections. In the first section, the maternal love found in *Mothers' Boys* is discussed. In the next section, the mother's agony and instincts in *The Fifth Child* is analyzed. In the final section, I give deep consideration to the complex range of emotions that motherhood entails.

## 序

*Mothers' Boys* (1994) の作者, Margaret Forster は 1938 年, イギリス, カーライルに生まれオックスフォード大学で歴史を学び, 現在ロンドンおよび湖水地方に在住, 3 児の母親である。同時代作家の Margaret Drabble と並んでイギリスでは中堅作家として活躍中であり, これまでに 16 の小説と 5 つのノンフィクションを書いた。彼女の作品は, 日本ではまだ 3 作しか翻訳されていないが, 筆者が彼女の作品に注目したのは, 淡々とした明解な文章の中に女性作家ならではのこまやかな視点がどの作品にもあり, 登場人物の描写にも彼女のやさしさが感じられるからである。Drabble や Doris Lessing の作品に多く見られるようなウーマンリブの強烈なメッセージは聞こえてこないが, 複雑な人間関係の機微と人の心の襞がみごとに描かれており, 特にこの作品にはタイトルに顕れているように, 筆者の長年の研究テーマである母と子どもの関係から生じる母性が描かれている。

本稿は第 1 章で *Mothers' Boys* の 2 人のヒロイン, Harriet と Sheila と子どもたちとの関係, 第 2 章で Lessing の *The Fifth Child* に見られる母子関係および *Mothers' Boys* との関連, 第 3 章で母性: 子どもに囚われる母, に言及し考察を加えるものである。

## 第 1 章 *Mothers' Boys* の Harriet と Sheila

簡単に言ってしまうと, この小説は傷害事件に巻き込まれた少年 Joe とその母親 Harriet の苦悩, 加害者の少年 Leo とその祖母 Sheila の苦悩, そして Harriet と Sheila との奇妙な友情がテーマであ

る。普通このような状況では、被害者の親は、加害者とその親にも憎しみや怒りを抱き、加害者を許せない心境になると思われるが、この作品ではお互いの母親たちが相手の心中を思いやり、相手の苦悩を感じ取り手紙をやりとりしたり家を訪問したりして奇妙な関係を作っていくのである。子どもたちにとってそれが救いになるわけではなく、なんの解決になるわけでもないが、Forster は犯罪に遭ってしまった子と親、偶然加害者のグループにいたことで真犯人扱いされてしまった子と祖母との関係を現代の不穏な社会の日常にいつでも起こりえる状況として淡々と描いている。

## Harriet と Joe の関係

Harriet の次男 Joe は、男らしくスポーツ好きな長男 Louis とは正反対な ‘innocent and tender-looking about him, something sweet’ (p. 27 以下、本章の引用ページ数は *Mothers’ Boys* による) な 12 歳の少年として登場する。Harriet はデザインの仕事をしながら絹のスカーフや手作りの小物などを売る小さな店をもつ 45 歳の母親であり、2 人の男子の母親として湖の近くの家で平凡な暮らしをしている。事件はそんな美しい陽の光いっぱいの夏の日に始まる。ただ、冒頭部分 7 ページまでの間に、後に Joe が襲われることになる凶器としての ‘knife’ という語が 14 回もあることで、読者に不吉な未来を暗示している。また熱しやすく冷めやすい 12 歳という年ごろのナイーブな少年の危うさは所々に描かれる。

He was so volatile, could swing from boisterous happiness to utter gloom within five minutes and not always with any explanation. (p. 5)

友達と公園にピクニックに出かけた Joe は自宅から持ってきたメロンをナイフで切ろうとしたところ、暴漢に襲われ、辱めを受けてしまうがストーリーの初めにおいては事件の詳細は読者に明らかにされないし、Harriet にもわからない。Forster の読者の興味を引き付ける手法であろう。辱めが性的なものまでに達しているのかも知らされないが、Joe が発見されたときには汚物にまみれ大けがをしていたことだけは確かである。Joe はこの事件以来、以前にもまして内気で沈みがちな子どもとなり、彼の苦悩が Harriet の苦悩となりその苦悩は 17 歳になるまで尾をひくことになるのである。

ただ問題なのは、Harriet が ‘innocent’ で ‘tender-looking’ な Joe にいつまでも兄のように強い男性ではなくかわいい息子のままでいてほしいという思いをもっていることである。

She said she didn’t want Joe to ‘toughen up’, she wanted him to stay the same sweet, if difficult, boy he had always been. (p. 27)

事件の後、朝になると Harriet は、もはやかわいい Joe ではなくなってしまうことを想像し愕然とする。

In the mornings, she fancied she saw that Joe’s sweetness had gone for ever. (p. 28)

裁判の後、1 ヶ月ほどした頃、事件を知った友人たちからのたくさんの慰めの手紙の中に、加害者とされる Leo の育ての親(祖母) Sheila (後述する) からの短い手紙を見つける。それは短いが誠実なもので孫の起こした罪を心から謝罪するものであった。しかしながら Harriet はまだ心の傷の癒えない Joe を 1 人にしてはおけない。

... she never wanted him to feel deserted, to come down and find the house empty and feel he had been abandoned. From the very beginning—the beginning of afterwards—she'd been convinced Joe needed company at all times. (pp. 46-47)

ここでは、子離れできない Harriet の心理が描かれていると同時に、Joe が母親の過保護をきらっているのもうかがえ、12 歳という年ごろの微妙な心理が読み取れる。‘I’m not a fucking baby, okay?’ (p. 49) と言いながらもまだ母親の比護のもとにいたい気持ちが描かれる。

Harriet と Joe の悩みは肉体的な苦痛ではなく心の傷であることが、なおさら Harriet を苦しめる。

He couldn’t see good any more, he had no faith in luck. His vision was black, he had proof that evil existed. ... what he couldn’t do was recover his youthful ignorance and natural optimism. It had gone, nearly a year ago, in half an hour. (p. 68)

事件以来、Joe にかかりきりになっていたため仕事を辞めた Harriet の心の拠り所はもとのかわいい Joe の復活だけとなる。つまり Harriet は自分が Joe といつも一緒に過ごすことによって苦悩を背負おうとするのである。Forster がこの作品のタイトルを *Mothers’ Boys* としていることにうなずける箇所である。

Harriet was too soft, too indulgent, towards Joe. She’d made herself into his whipping boy. Everything Joe said and did was excused because of what he had suffered .... (p. 74)

Harriet の姉である Ginny には 2 人の娘がおり、1 人は糖尿病患者であるため、彼女も苦しんでいる。しかし Harriet は自分の心の苦悩のほうが何倍もの苦しみであると感じている。そんな Harriet に対して Ginny は Harriet が Joe の変化（それは青年期への成長でもあるのだが）、扱いにくさ、反抗などすべてを一夜の暴行事件のせいにしてしまうと詰問するが、事件以来やせ細ってしまった妹を抱きしめるだけで慰めにはならない。Harriet は Joe が受けた辱めはけっして終わらない苦しみであると嘆く。

‘How can *you* of all people say it’s over? It isn’t. Nobody understands. It really isn’t, it never will be, he’ll never be the same, never.’ (p. 79)

長男の Louis との違いは生まれる時からだったことがうかがえる。軽いお産で生まれ、元気潑刺、健康でかわいい Louis と対照的に、Joe は帝王切開で生まれた 5 パウンドの弱々しい子どもであり、2 歳になっても兄のような強さは身につかず、母親に似て内省的な、いつも何かに脅え、容易に喜ばない子どもとして描かれる。それが Harriet を余計にいらだたせ、心配を募らせる。

ここで指摘したいのが、母親と息子の微妙な関係である。傷ついた息子の心を癒そうとすればするほど、両者の間に軋轢が生じることは Harriet の次の思いに描かれている。2 人はお互いの心中を察し、思いやっているがためにつらくあたることになるのだ。

He slammed out of the kitchen and up to his room. Another slam. The tears came again, horrifying her. He couldn’t help it, she knew he couldn’t, that was how all his misery came out, in that kind of ugly way. He didn’t behave like that with anyone else, only with her. Even when he was foul to Sam it wasn’t in that way. She just had to take it, show him she could bear

anything and not flinch. She was the one person who loved him so much, so much that no matter how she was treated by him, that love would endure. (p. 83)

Joe の言葉、行動は家庭内暴力ではないかと思われるほどであるが、Harriet はそれに耐えると言っている。

Sheila の短いながらも誠実な書簡を読んで、Harriet は誰にも内緒で彼女に会おうと決心するのであるが、その理由は悩みぬいた彼女が母性はどのくらい深く、またどのようなかたちで、もてるものなのかを知りたかったからではないか。

The truth was that she didn't know. The truth was, that was the real reason she wanted to meet Mrs Armstrong, to see if her mother's love stretched that far, could encompass such a nightmare. (p. 84) (下線筆者)

Harriet は事件以来自分には暴言をはき、会話をしようとしないう Joe を目の当たりにすると、彼が 1 日の出来事をすべて情熱をもって話し、それを何時間でも楽しく聞いていた過去をふりかえり、自分のものであったいという Joe を懐かしく思い出す。

Please let this happiness stay, let it not escape, let it last and last and never be interrupted, I will give anything to keep our life like this again. Anything. (p. 151)

Harriet にとり 'My sweet boy' が変わっていくことは、夫の Sam と寝るベッドのきしむ音にも象徴される。寝返りを打つたびにする 'awful, whining noise' (p. 156) は Harriet の心にひびいている不協和音ではなかったか。そんな彼女の気持ちをよそに Joe は兄の Louis に母親から離れたい、1 人にしてほしいと母親からの巣立ちを願うようになり、帰宅したくない胸の内を告げる。

'She'll be there. I know she will. I can't stand it.' (p. 176)

Harriet は Leo 以外の確信犯の Identification Parade<sup>(注1)</sup> の後、事件を思い出し再び沈み込んでいく Joe を見て、彼が自分から離れていくのを感じ始め、今までにない寂しさを実感する。

She had never known misery could dominate in such a way. She couldn't bear to look at him, couldn't bear to feel him in a room with her. (p. 187)

そしていよいよかわいい Joe にとって自分は重荷なのでないかという思いに至る。

...she felt...she was a burden to Joe. Her pain for him was a burden, her agonized concern a stone round his neck. He couldn't get free of his memories, he couldn't get free of her. (p. 188)

まさに母性が子どもを縛り付けていたことによろやく気づくのである。16 歳になった Joe は警部補からプレゼントを受けとるが、それを開きもせず感謝の意も示さないばかりか、'kindness, compassion, tenderness, consideration and especially sympathy' (p. 198) にはあきあきしていると言ひ、泣き出す場面において、Forster は甘やかされた思春期の子どもの微妙な心理を描いている。また Harriet が遭遇した病院でのできごと（血まみれの赤子が運ばれ、動転している母親）について話した折、同情を示さないばかりか、smirk（にやにやする）するだけの Joe を見て、母性が背かれてい

くのを悟っていく。

‘But how could any woman love him when he’s like this? When even I, his own mother, feel repelled?’ (p. 210)

その後 Joe は運転免許を取得したり、ガールフレンドの出現などで、徐々に未来への願望をもち始めるが、それが Harriet にはまた心配の種となる。母性の大部分が心配でなりたっているのではないかとさえ思われる。それは Harriet に子宮癌の疑いがあり、入院して検査をすることになっても、Joe には心配をかけまいと秘密にすることからもうかがえる。‘There was no room in Joe’s life for her to be ill.’ (p. 231) と自分の健康より Joe のことを気遣い、どんな荒波にも屈しないように、彼の防波堤にならなければと強く生きようとするのである。自分の病気を最愛の息子の心配の種にならないように秘密裏に処理しようと心をくだくのは、母性ならではの強さと同時に弱さでもあるのではないか。夫の Sam は過保護な Joe への接し方には多くの疑問をもっているが、Forster の描く父親は子育てには厳しく、時には無関心、時には冷静であり、客観的であり、母性のもつ子どもへの執着とは対照的である。子どものために夫婦が敵同士になっていく皮肉を描いている。‘I was just seeing Joe aged sixty being protected by you, even in your dotage.’ (p. 249) とからかうが、Harriet には冗談も通じないのである。

Identification Parade の結果真犯人が突き止められ、再度裁判が行われた。法廷に立った Joe はガールフレンドが傍聴していることもあって、最初の裁判の時とはまるで違い‘pale, vulnerable’な少年から自信にあふれた青年へと成長を見せていた。ただ Harriet の苦しみはまだ消えない。

It was she who would never be over it. Never. The further Joe travelled away from her the greater the conviction that she would never readjust, .... (p. 310)

## Sheila と Leo の関係

Sheila は Harriet より年上の 69 歳である。最愛の 1 人娘 Pat は独立心旺盛で海外を飛び回り、音信だけの母子関係で、アフリカで有色人種である現地の医者と結婚し息子 Leo をもうけた。ところが、13 年前にまだ 3 歳の彼を残して Pat 夫妻は自動車事故で亡くなってしまった。Sheila にとってアフリカは未知の土地ではあるが、祖母ということと、深く愛していた娘の遺児ということで彼をアフリカまで引き取りに出かけ、自分の息子として育てることになる。Leo が傷害事件を起こした（後に、主犯でないことが判明）というニュースの箇所では ‘anger’ という語が 8 行の間に 5 回も出てきて Sheila の心中が察せられる。娘 Pat を突然失った悲しみ、孫 Leo を自分の息子として育てることになった数奇な運命、孫が罪を犯すことにより母親がわりの自分も巻き込まれてしまったこと等に対する怒りであろう。Forster は *The Battle for Christabel* においても Christabel という、やはり有色人種の少女を主人公にして、英国人の心に潜む差別意識を描いている。それは、Sheila が感じるのとは love ではなく ‘duty’ であることからわかる。

She’d come out of duty not love, not love of Leo, her unknown grandson. It was her bounden duty to come and take Leo home, her duty to Pat, to her whole idea of what family meant. (p. 19)  
(下線筆者)



‘duty’ という語が3行に3回（原文）出てくることから、Sheila の最初の気持ちは祖母としての義務感であったに違いない。娘の事故のニュースを聞いて以来、Sheila の心には人生をあるがままに受け取らざるをえないという気持ちがある。犯罪事件を起こした後、弁護士から Leo の生い立ち、両親の死、人種の壁などが Leo の中でトラウマになっているのではないかと事件の要因を分析されるが、Sheila には Leo がたったの3歳であったことなどを考えるとそれを理由にはできないと考える強さがある。また保護監察官 Helen が ‘Parents can’t help how their children turn out, can they?’ (p. 39) と Pat の悲惨な最期と、残された Leo の運命、Sheila がこれから遭遇するであろう困難を予想して言ったことに対して、Sheila の気持ちが描かれる。

The same feelings she’d had so many years ago, bringing Leo home. Nothing had felt right from the moment the news of the accident came. Nothing was ever really right ever again, but life went on. (p. 39)

Leo が Sheila の人生をすっかり変えてしまった。彼女は、‘Leo had changed her life irrevocably. Life was about putting up with everything that happened.’ (p. 40) と人生とは耐えることと定義づけ、墓碑にも ‘She Put Up With Everything’ (p. 40) と刻まれることを願うのである。

Sheila は悲しい運命を背負った Leo をあらためて自分の子どもとして育て直す覚悟をして、少年院に入れられている Leo に会いに行くのである。

But the past was the present and future too, It had to be lived with. Leo was still their grandson, he could not be disowned. (p. 54)

ただし Forster は Sheila の強さや忍耐力だけを描きはしない。彼女も弱さをもっていることを示している。なぜなら当然のごとく、彼女は少年院から出た後の Leo をどのように扱ったらいいかという恐怖感におののく。

It was dangerous even to *think* of Leo being released. Dangerous from every point of view. ... Her greatest terror was just that: Leo out, Leo back in their house, a stranger, secretly a wicked, violent stranger who’d be her responsibility, ... (p. 62)

恐怖に打ちのめされそうな彼女を支えていたのはプライドであったのか。これは彼女の近くで暮らす 89 歳の実父 Eric James Armstrong との関係から推察される。彼はどんなことがあろうと Armstrong 家のプライドをもち、誰からも憐みを受けるなという姿勢を示し続ける。その強さは Armstrong という Family name の印象とも重なる。

Leo も成長するにつれ、「もし Sheila が迎えにこなければどうなっていたか」、「自分の生まれたアフリカから誰か迎えにこないのか」というような質問をするようになり、自分の父親のことを知りたくなる。自分のルーツを訪ねたいという思いは 16 歳くらいになれば当然のことであろう。強い Eric はこう言うのである。

‘Send him back to Africa,’ Eric James at one time had said, with such cruelty. ‘That’s where he belongs, in the jungle, carrying on like that, just an animal.’ (p. 98)

Leo は少年院を訪ねてくる Sheila に対しても信頼も忠誠心も見せなくなる。

He was like a zombie, he couldn't talk to her any more. (p. 99)

こう思わせながらも Forster は Sheila の母性を描く。Sheila はあの一夜の事件の時だけ Leo が 'rotten' で 'evil' であったと思いたいのである。警官が言う "“Mothers,” ... “they’re all the same when it’s their little lamb.”" (p. 99) はこの作品のテーマでもあろう。

Sheila と父親との関係に言及するのは、テーマから離れるが、年老いた父が Leo を彼なりの方法で愛し、強い生き方を教え込んだ人として感謝している場面は随所に見られる。4 歳の時、川で溺れそうになった Leo を助けるという事件の際、Sheila は 'It was the first indication of how much Leo meant to him' (pp. 152-153) と Leo の出現により、心やさしくなった父親に気づくのである。それと同時に父のように無条件に Leo を愛せない自分がいることにも気づく。

The truth was, she had not shown that absolute faith in Leo's innocence which a mother might be expected to show. (p. 182)

Forster はそんな Sheila の微妙な心理を Eric との会話、彼に対する気持ちなどを巧みに利用してえぐりだす。Leo が娘の人生を地獄にしまったと言う Eric に対しても否定するが、「Leo の問題は彼の問題であるから彼にまかせろ」という言葉には複雑な気持ちになるのである。

事件を起こした主犯が特定できて Leo は drug を飲まされ knife を握らされていたただけだということが判明すると、徐々に彼への愛情が深まってくる。誰にも面会したくない、釈放になっても家には戻らないという Leo に対しても 'He's everything to me, Leo is. I'd love him to death whatever he did.' (p. 202) と言い、彼への愛情がもはや 'duty' からではなくなっているのを感じるのである。ただ、Leo の将来まで考えると怒り以上に困惑でいっぱいになるのである。

Leo が少年院から脱走したことがわかった時、彼が逃亡に成功しどこかに落ち着いたら連絡してくれるかもしれないと一縷の望みをもつ。しかし一方で、自分はその時もうこの世にいないかもしれないとまで思う。

Did mothers really die not knowing what had happened to their sons? Knowing they were out there in the world somewhere, but not knowing where or how they lived or with whom? The horror of it stole over her, her whole body grew cold, and then she was startled to feel the tears running down her face. (p. 239)

強い Sheila も自分の死後まで考えてしまう。孫が犯罪者グループにいたことで、将来どのようにして生きていくのかと思いをはせるのは母性からでなくてなんであろう。

Leo, her only real pleasure, and he was gone for good. First Pat, then Leo. Farewell to pleasure... (p. 252)

Leo は少年院から脱走後、曾祖父 Eric のところへ逃げ、Eric が貯めていたお金を持って再び逃走したことがわかり、なぜ母親代わりの自分のところに戻らなかったのかと思悩む。頼っていたのが自分ではなく自分の父親であったのだから。

What kind of love was that, if it was love? Maybe the sort a mother should have and she'd been incapable of. Maybe it was mother love, uncritical, limitless... (p. 278)

今は、Sheila と Eric の前に現れ、事件を起こし彼らの人生を変えてしまった 1 人の少年への愛が無言のうちに 2 人の親子を結びつけているのである。

All that joined them was the loss of Leo, their love for him, and they never spoke of it openly, not even at the very end. (p. 295)

Sheila は Eric が Joe をあるがままに受け入れていたこと、自分は彼に ‘image of what she wanted him to be’ (p. 312) をもってしまっていたことに気づく。

## 第 2 章 Doris Lessing の *The Fifth Child*

1988 年に出版された *The Fifth Child* はたくさんの子どもに恵まれた幸福な家庭を追い求めた Harriet と 5 番目の子ども Ben との関係がメインの作品である。Forster がこの作品を読んだかどうか不明だが、特に Sheila と Leo との関連で類似性が見られる。また Harriet という名前も同じであり、母性にあふれた母の苦悩が描かれる。夫 David から自分の母は母性的ではないが、妻はそうだという箇所がある。

“You are not maternal,” said David. “It’s not your nature. But Harriet is.” (p. 13 以下、本章の引用ページ数は *The Fifth Child* による)

Harriet は 6 年間のうちに 4 人の子ども Luke, Helen, Jane, Paul に恵まれ、親戚の人たちも大きな家に集い、それは David & Harriet Lovatts 家の望む大家族となる。ストーリーの中に何回も出てくる ‘great family table’ はいろいろな人たちが出入りするにぎやかで幸せにあふれた family の象徴であった。Ben が生まれるまでは ‘happy’ という語が何回も出てくる。

Happiness. A happy family. The Lovatts were a happy family. (p. 21)

ところが 5 番目の Ben は *Mothers’ Boys* の Joe がそうであったように、妊娠中から違っていた。

... she had felt a tapping in her belly, demanding attention. ... imperative beat, like a small drum. (p. 36)

Ben は胎児のときから不吉なかげを落としており、そのエネルギーは彼女を内側から突き破る勢いをもっていた。つまり Harriet の Ben との闘いは、すでにお腹の中にいる時から始まっており、David との仲も徐々に離れていくようであった。生まれてくる前から ‘pathetic botched creatures, horribly real to her, the products of a Great Dane...’ (p. 41) であり、4 人のいとしい子どもたちとは似ても似つかない ‘muscular, yellowish, long’ (p. 48) で ‘pretty baby’ ではなかった。Ben は ‘troll, goblin, dwarf, alien, monster fish’ などと形容され、口には出さずとも子どもたちや親戚の人たちにも異常な赤子にしか見えない。しかし Harriet は ‘A normal healthy fine baby’ (p. 51) と病院でも言われ、そう思い普通の赤子として扱おうと努力する。David は恐れて Ben に触れようとしないうちに Harriet は悩み自分でも愛せない。

This afflicted Harriet with remorse: poor Ben, whom no one could love. She certainly could not! And David, the good father, hardly touched him. (p. 56)



‘Poor Ben, dear Ben’ という母のよびかけにも勝ち誇ったような薄笑いをするだけである。Harriet はできるだけ普通の赤子として扱おうとするのだが、Ben の誕生以来 David と Harriet の間でもまた Ben とおなじような子どもができてしまったらという恐怖でいっぱいになる。Ben は彼らにとっては当たり前だった幸福な日常を壊しにやってきた侵入者である。

That creature arrived when we were being as careful as we knew how—suppose another like him comes? ... Ben. ... had invaded their ordinariness, ... (p. 58)

一番下の Paul が Ben に近づき腕をひねられるような事件以来、6 ヶ月にならない赤子が ‘happy family’ を壊していると感じるのである。

... he was going to destroy their family life. (p. 59)

皆が集う楽しい家はもはや崩壊してしまった。笑いの絶えなかった家族には、緊張と疲れが見られるようになり、クリスマスのパーティーには今までの半分の人たちだけが集まり、Ben は Harriet が常に見張っていなければならないほど兇暴な子どもとなっていく。

とうとう David は幼い Ben を引き取ってくれる施設を見つけ預けることを勝手に決めてしまう。彼は Harriet の “‘He’s a little child,’ she said. “*He’s our child.*”” (p. 74) という声に「自分の子どもではない」と答えるのである。この一件は他の子どもたちに、平安に過ごせる気持ちを与える一方、自分たちも何処かへ行かされてしまうのではないかという疑心暗鬼をめばえさせることにもなる。しかし Ben のいなくなった家は水に入れられ開いていく紙の花のようにのびのびとした雰囲気になっていくのを見て、Harriet は Ben がどれほど家族を苦しみ怯えさせていたかを知る。子どもたちの目は輝き、元気にあふれ、今まで Ben にかかりきりだった Harriet のところに甘えにくるようになる。しかしここで Lessing は、母親であればどんなに兇暴であってもわが子である Ben を忘れることはできないという Harriet の母性を描く。

Of course she thought all the time of Ben, who was a prisoner somewhere. What kind of a prisoner? (p. 77)

Harriet は Ben を思いながら、産んでしまった自分を責めるが自分が罪を犯したとは認めない。

Now it seemed to her the truth, that everyone had silently condemned her. I have suffered a misfortune, she told herself; I haven’t committed a crime. (p. 78)

Lessing は Harriet を通して、外見は弱々しいが内面は強い母を描いている。ようやく夫 David から施設の住所を聞き出し Ben を迎えに行くのである。施設では Ben は薬を打たれ無意識の状態で汚物にまみれて床に転がされている状態であった。この情景を見た Harriet は思う。

Pathetic: she had never seen him as pathetic before. (p. 83)

家に連れ帰ってから Harriet は他の子どもたちからはなるべく隔離し、Ben を教育しようとするのである。

How she felt at this time was that she was shielding them from Ben while she re-educated him

for family life. (p. 89)

しかし ‘poor Ben’ と自分を呼びながら、彼の異常さが治ったわけではなく、Ben が生の鶏肉をむしり食べるという事件を子どもたちも目の当たりにして、家族のそれぞれの心には再び恐怖心があふれていく。その後兄妹3人は寄宿学校へ行くこととなり家族がばらばらになっていく。Paul のみが家に残り、母親は Ben にとられてしまったという嫉妬で彼の心はいっぱいになる。そんな状況を見て Harriet は自問自答するのである。

...she had had no alternative but to bring Ben back from that place. But because she had, and saved him from murder, she had destroyed her family. Had harmed her life ... David's ... Luke's, Helen's, Jane's ... and Paul's. Paul, the worst. (p. 117)

Ben をとりもどしに出かけた結果、Harriet が家族を崩壊に導いたと、Lessing は Harriet を ‘scape-goat’ (p. 117) と表現している。

11 歳になり学校へ行くようになった Ben はギャング集団と友達になり、以前は幸福の象徴であった ‘big family table’ はギャングの食べ散らかしとわめき声に囲まれてしまった。物語の最後にテーブルを見ながら回想する箇所があるが、パーティーに集った人々の笑い声が聞こえるかのようで幸せにあふれた過去と、そこに映る年老いた自分、そしてすべてを破壊した Ben のいる現在とをしみじみと考える。——もし Ben をそのまま施設に置いて死ぬにまかせていたら、家族はもっと幸せになっていたのか——と考えもするが、それは母としてできなかったのである。やがて Ben はギャングたちと都会へ去って行く。だが Ben はギャングたちと帰ってくるかもしれないし、新しい家に引っ越した後でも、郵便受けに入れられた新聞の写真などに Ben が群衆から離れて写っているのを発見するかもしれないという Harriet の淡い期待で物語は閉じる。最後の場面は、*Mothers' Boys* のいつかは帰ってくるかもしれないと Leo を待っている Sheila の母性と通じるものがある。

### 第3章 母性: 子どもに囚われる母

母性をテーマにおもに Forster の *Mothers' Boys* を中心にテキストを追って分析してみた。両作品とも Lessing が指摘しているように、背景には物質的繁栄のかげにある不穏な社会がある。

Brutal incidents and crimes, once shocking everyone, were now commonplace. Gangs of youths hung around certain cafés and street-ends... (*The Fifth Child* p. 22)

*Mothers' Boys* の Harriet と Sheila, *The Fifth Child* の Harriet は、愛するわが子に対する母性から、立場は違うにしろ子どもたちをどのように母としての比護のもとに置いておけるのか悩む。それは *Mothers' Boys* で Joe が自立して自分を離れていく時でさえ感じる Harriet の心境に凝縮されている。

What was the point of having children and loving them so much if you couldn't protect them? She had this curious, painful desire to be forgiven without being able to establish in whose gift forgiveness lay. (*Mothers' Boys* p. 311)

ここで母性という言葉の定義から考えてみたい。林 道義氏によると、

「母性とは、子どもを産み育てる過程で働く、受容的な優しい心の働き」である。この心の働きは、子どもを「養い、育て、世話し、保護する」という保育行動として現われ、「子どもを可愛いと感ずる」「慈しむ感情」を伴う。(注2)

と定義されている。2人の Harriet と Sheila がもっていたものである。林氏は、母性が十分にできるためには、母親の心が安定していて余裕がなければ、かえって子どもの成長をはばむことになるとも述べている。

まず第一に *Mothers' Boys* の Harriet と Sheila は、この養い、育て、世話し、保護しようと努力するのであるが、母性本能を貫き通そうとし、母 (Sheila は母親代わり) としての役割を果たそうとするあまり、まさに子どもの個性や人格の成長を妨げているように思われる。Joe は母の比護が強すぎ自分で障害を処理する力がなかなか育たず、ガールフレンドの出現により母からようやく離れられるのである。林氏は「子どもを呑み込んでしまう」(注3) という表現をしてユングの『元型論』(注4) に言及している。まさに Joe は過剰な無意識的母性本能の犠牲者と言えるかもしれない。

次に Sheila の場合、興味深いのは、実母でないことで母性はどのように変わってくるのかということである。林氏はこう述べる。

実母でないことの不利は、なによりも胎児のときの一体感を体験していないことである。生まれたときに、母親の心臓の音とか、声の感じといった自動的な一体感は欠けている。(注5)

Sheila が Leo を育て始めたのは3歳の時であるが、Forster は全力で Leo を育てようとする祖母の母性を描き、たとえ犯罪者グループに加担し少年院を脱走しても、いつか自分のもとへもどってきたら、保護しようとする彼女の強い意志と誇りを作品の最後で描いている。

She must present a strong and resolute front, show she had borne the weight of the tragedy and not cracked under it. Then he'd be relieved, and even proud of her, and he might stay. If he came back, if her boy ever came back and gave her another chance. (*Mothers' Boys* p. 313) (下線筆者)

つまり、もう1人の 'her boy' がこの作品のタイトルになっているのである。Sheila の強さとは、母性本能は子どもを産んだということだけで自動的に現れてくるような単純なものではないことがうなずける描き方である。

では *The Fifth Child* の母性はどう描かれているか。'Big table' を囲むたくさんの子どもたちに恵まれ幸せな家庭を追い求めた Harriet は Ben が胎児の頃から違和感を感じていた。しかし小悪魔のような Ben でも放っておかず、施設から連れ戻したがために幸福な家庭は破壊されてしまうのだが、Lessing は Harriet を通して何を描いているか。筆者は母性のもつ強さとともに恐ろしさであると考え。つまり Harriet は幸福願望があまりに強く、自分の幸福願望を投影した結果、Ben を普通の子どもとして育て上げるべく自己犠牲を尽くし、自分を責める。ある意味では衝動的に事を運び、自分の中では他の家族のことは考えられないのである。Lessing は、母性のもつ強さとともに、弱さも描いているのではないか。

ノンフィクション作家、澤地久枝氏は「母性とは女の人生をささえる強いてこ」と述べる。(注6) また鶴見祐輔の小説『母』には母性愛を貫き通して生きたヒロイン大河朝子を通して逆境に立ち向かった旧い女性の生き方が描かれている。書かれた時代、国は違っても母と子の関係、母性愛は普遍であ

ることを認識し、ますますこのテーマを掘り下げていきたいと考える。

管見によれば、母性には、F・アリエスの『〈子供〉の誕生』やバダンテールの『母性という神話』等の母性本能否定派と、F・ルークスの『〈母と子〉の民俗史』やL・A・ポロクの『忘れられた子どもたち』等の母性本能肯定派があるようだが、今後も文学作品における母性に関してさらなるリサーチをつけ、紙幅の都合上ふれなかった父性についても考察を重ねていく。

・本稿中の2作品は次のテキストによる。

Margaret Forster *Mothers' Boys* Penguin Books 1994

Doris Lessing *The Fifth Child* Vintage Books 1988

注

1 【英】証人に犯人を突き止めさせるための面通し

2 林 道義 『母性の復権』 中公新書 1999 p. 1

3 Ibid. p. 112

4 C.G. ユング 林 道義訳 『元型論』 紀伊國屋書店 1982 p. 113

「彼は幼児期の神々の世界から墜落し、もはや神なる母の息子としての英雄ではなかった。彼のいわゆる去勢恐怖は現実の生活に対する恐怖であった。」

5 注2 Ibid. p. 58

6 澤地久枝 『あなたに似た人』 文藝春秋 1977 p. 269

参考文献

林 道義 『母性崩壊』 PHP 研究所 1999

林 道義 『母性の復権』 中公新書 1999

信田さよ子 『愛情という名の支配—家族を縛る共依存—』 海竜社 1998

河合隼雄 『全対話—父性原理と母性原理—』 第三文明社 1989

大日向雅美 『母性は女の勲章ですか?』 産経新聞生活情報センター 1992

佐藤淑子 『イギリスのいい子 日本のいい子 自己主張とがまんの教育学』 中公新書 2001

C.G. ユング 林 道義訳 『元型論 無意識の構造』 紀伊國屋書店 1982

C.G. ユング 林 道義訳 『続・元型論』 紀伊國屋書店 1983

澤地久枝 『あなたに似た人』 文藝春秋 1977

鶴見祐輔 『母』 講談社学術文庫 1987

(にわ まさこ 英語コミュニケーション学科)